高校編㊷ 最新事情

資格取得と探究活動の両立により、幅広く活躍できる商業人材を育成する

埼玉県立浦和商業高等学校

（埼玉県さいたま市）

昭和2年に創立した埼玉県立浦和商業高等学校。商業教育の伝統校としてこれまでに数多くの優秀な人材を輩出してきた。同校のマナー教育の一翼を担うのが秘書検定だ。多様な分野で幅広く活躍できる商業人材の育成を目指す同校の取り組みを伺った。

埼玉県立浦和商業高等学校。ボート部や電脳部，珠算部は全国大会の常連だ

資格と探求の両立で学びの循環を作り出す

今年で創立96年を迎えた埼玉県立浦和商業高等学校。歴史ある伝統校として、優れた商業人材を数多く社会へ送り出してきた。現在はマーケティングや簿記などを学ぶ商業科、プログラミングや情報システム設計などを学ぶ情報処理科の2学科に820名が通う。卒業後は約6割の生徒が進学、約4割の生徒が就職を選択する。

「真面目で落ち着きがあり、規範意識も高い〝浦商生〟。しかしここぞという場面では、主体的に行動する力強さを持ち合わせている」。内田靖校長は生徒の様子をこのように語る。

同校では「多様な分野で幅広く活躍する商業人材の育成」を目指している。そこで取り組んでいるのが〝資格取得と探究活動の両立〟だ。今年度から始まった新学習指導要領では「課題研究」の位置付けが、資格の取得重視から主体的・対話的な学びへと大きくシフト。しかし以前から商業教育の資格偏重に限界を感じていた内田校長は独自の取り組みを行ってきた。

まずは学校生活の中で生徒がアウトプットする機会をできるだけ増やすようにした。授業では生徒が意見を述べたり、議論したりする時間を必ず設けている。課外活動や行事でも生徒自身が前に立って発言するよう促してきた。

さらに論理的思考力、表現力を高めるトレーニングを日常的に行っている。例えば意見や感想を記述する際、2文あるいは4文で書かせることで、文の構造を意識させるのだ。「自分が伝えたいことを筋道立てて表現できるようになり、論理的に思考する訓練にもなる」と内田校長。

外部と連携した授業にも力を入れており、OB・OGや大学・企業人を招いて、講演や特別授業を行っている。

「外部と関わることで、今の自分の学びと社会とのつながりを実感できます。同時に、活躍している諸先輩方から刺激を受けて、もっと勉強しようと意欲を持ってほしい。よい学びの循環が生まれてくれたらうれしいですね」（内田校長）。着任から今年で4年目。最近では自分の考えを的確に表現できる生徒が増えたと感じるそうだ。

秘書検定を通して社会人の振る舞いを学ぶ

同校では探究的な学びの充実とともに、資格

内田靖校長。「アウトプットの機会が増え、積極的に行動する生徒が増えてきました」

取得に関わる学習にも力を入れている。

「資格の勉強とは高度な知識や技能を学ぶこと。よりよいアウトプットのためには、インプットの充実が欠かせません」(内田校長)。

生徒たちも卒業後の進路にかかわらず、資格取得に意欲的だ。個人的に受験をしたり、商業系の部活動で資格取得に挑戦したりする生徒もいる。そんな生徒たちを後押ししようと、「3種目1級70人」プロジェクトを立ち上げた。3年生のうち70名以上が全国商業高等学校協会主催の検定試験の1級を3種目取得することを目指す。

また同校では「課題研究」の中に秘書検定を取り入れている。社会人としての基礎的なマナーを学びたい生徒が秘書検定を選択することが多いそうだ。所作や振る舞いなどを実践的に学ぶ「総合実践」と合わせて、同校のマナー教育の柱である。

秘書検定の指導に当たる教員のうちの一人、商業科教諭の松下貴子先生は「卒業後は即戦力として期待されることが多いため、今のうちに社会人として必要な知識や振る舞いを身に付けたいと考えるようです」と話す。

まずは生徒に〝社会人の文化〟に慣れてもらうことから秘書検定の指導が始まるという松下先生。初めに上下関係や仕事の進め方など、社会人の価値観や考え方をたたき込んでいく。先生が補足や解説を加え、問題集を繰り返し解く。

「秘書の働き方や考え方を解説するとともに、一般社員の働き方と対比させることで、より実践的なケーススタディーとして紹介します。秘書として働く友人の話を交えるなど、できるだけ実社会に沿った学びになるようにしています」(松下先生)。

ペアワークやグループワークでは、学んだことを実践し理解を深める。集大成は三学期に行うお茶出しの実演だ。お辞儀・あいさつ・言葉遣い・席次など、秘書検定の学びが全て詰まったお茶出しの一幕をお客さまともてなす側に分かれて演じきる。身体を動かして楽しく振り返ることができるため、生徒たちは盛り上がるという。

秘書検定を受けると、マナーや言葉遣い、先を見越した行動などあらゆる面で成果を感じるという松下先生。「残り少ない高校生活も、素直な心で多くを学び、思い出をたくさんつくってほしい」と生徒への思いを話してくれた。

「課題研究」秘書検定の授業風景。二人一組になって，自分が正しいと思う敬語表現を言い合う

どんな仕事に就いても コミュニケーションは必要

商業科3年生の伊藤優香さんと関根千夏さん

同じく「課題研究」秘書検定の授業。テキストを読み込み，繰り返し問題集を解くことで，秘書の働き方や考え方に慣れていく

最新事情 52……埼玉県立浦和商業高等学校

はともに令和3年に秘書検定3級に、令和4年に2級に合格した。将来の夢は公務員だという伊藤さんは、秘書検定で学んだ敬語や言葉遣いを仕事に生かしていこうと考えている。

「人と話すときはいつも緊張してしまうのですが、秘書検定を通じて学んだことで言葉遣いに自信が付いたので、今後はお客さまとの会話にも落ち着いて臨むことができそうです」(伊藤さん)。

秘書検定の勉強を通して、人間関係や気遣いの方法を学んだという関根さん。秘書検定で得た学びを積極的に普段の生活の中でも生かしているそうだ。

「友人とけんかになりかけた際、秘書検定で学んだ〝相手の発言を受け止めてから、自分の意見を伝える〟テクニックを実践してみました。すると、相手も落ち着いてくれて言い争いを回避することができました」とうれしそうに話してくれた。

(左から)商業科3年生の関根千夏さんと伊藤優香さん。二人とも在校中に準1級の取得を目指す

情報処理科3年生の三上龍之介さんと松浦佑介さんは、令和4年に秘書検定3級に合格した。社会人としての立ち居振る舞いを学びたいと思い受験をしたという三上さん。秘書検定の勉強の中で一番面白かったのは車の席次について。

「事故の被害を受けにくい位置に上司を座らせるなど、身近なところに自分の知らないルールやマナーがあることに驚きました。ルールには意味があることに気が付くきっかけにもなりました」(三上さん)。

秘書検定を通して、〝ほうれんそう〟や仕事の進め方など、働く際に必要なコミュニケーションを学ぶことができたという松浦さん。勉強を進める中で理解に時間がかかったのが秘書の職務権限だ。

「学校では常日ごろから、自分で考えて行動しなさいと教えられています。当初は秘書の働き方に違和感を感じていましたが、次第に、役割や立場によって求められる行動が違うのだと理解することができました」(松浦さん)。

秘書検定での学びを着実に力にしている生徒たち。卒業後は関根さん・三上さんは進学、伊藤さん・松浦さんは就職の予定だ。

医療系の専門学校に進む予定の関根さんは、将来は対話ができる社会人になりたいと話す。

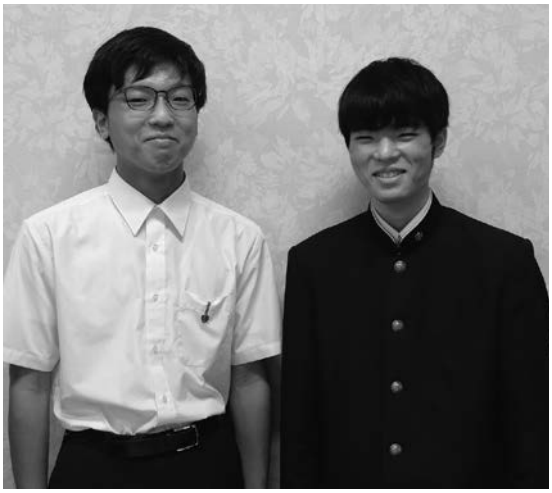
「人の意見をきちんと聞いて、自分の意見を伝えることができれば、相手とよりよい関係を築けると思います」。

三上さんは大学に進学後、プログラマーとして働きたいと考えている。「社会へ出たら、周囲をサポートできる人になりたいです。自分の仕事をこなした上で、気配りもしていけたらと思っています」。

公務員を目指している伊藤さんは、中でも税務署勤務を希望している。「言うべきことはきちんと言い、なおかつ感じのよい対応ができる社会人になりたいです」。

松浦さんは今後、システム開発の仕事に携わる予定だ。「システム開発は顧客の話を聞きながら作業を進める仕事です。秘書検定で学んだコミュニケーション能力を生かして、誰とでも協力していける人になりたい」。

四人は力強く抱負を語ってくれた。



(左から)情報処理科3年生の松浦佑介さん,三上龍之介さん。今度は2級の取得に挑戦する